

第7話 島原の乱と鎖国

キリスト教の厳禁。 圧迫に圧迫を加えられた信者らが、ついに乱を起こして島原半島の原城に立てこもる。 幕府は漸くにしてこれを鎮定するが、乱後、いよいよキリスト教を嫌い且つ恐れて、さらに鎖国令を出す。

九州の三大名が使いをローマに遣わす

織田信長が、そのころ、あまりにも横暴になっていた仏教徒を抑えようとする政略からでもあったとはいえ、ともかくも一時キリスト教を保護して、自由に布教することを許したために、忽ちそれが殆ど全国に拡がって、九州、中国はもとより、関東、奥羽地方にまで数多の信者を出すに至ったことは、すでに第4巻「室町・安土桃山時代」の「キリスト教の伝来」の話で述べておいたところです。

とりわけ豊後（大分県）の大友義鎮、肥前の大村純忠および有馬晴信の3大名は、篤くこれを信仰するあまり、ついに天正10年（西暦1582年）1月、使いを遠くヨーロッパに送って、ローマ教皇に敬意を表すことにした。 正使は義鎮の従姪の伊東義賢と純忠の甥の千々岩清左衛門との2人で、中浦某と原某との2人が副使でした。 いづれも15、6才の少年で、一行の案内役にはインドから来ていた宣教師のワリニアンが立った。

日本人の最初のヨーロッパ渡航

彼等は天正10年1月28日に長崎を出帆したが、中国やインドの港に寄って、滞在を重ね、インドからはワリニアンに代わって案内に立ったヌニヨ・ロドリゲスという宣教師と共に、アフリカの南端、喜望峯をまわってポルトガルの首府リスボンに到り、更にスペインの首府マドリードを経て、イタリアのローマに着いた。 天正13年（西暦1585年）3月22日のことです、翌23日、一行は教皇グレゴリー13世に謁して、親しく大友氏らの信書を呈して、よく使節の任を全うした上に、いたるところで歓迎を受けたりして、天正18年7月21日に長崎に帰り着いた。 実に出発以来8年余りを費やしたのです。

これが我が国人のヨーロッパに渡った初めで、この時、彼等が齎し帰ったものには地図、地球儀、時計などがあった。 かの支倉常長らが伊達政宗の命を受けて、メキシコを経てヨーロッパに渡ったよりも実に24年前でした。

西洋の学問・技芸の伝来

こうして、キリスト教の拡まるにつれて、西洋の学問や技芸も次第に伝わった。



ローマ字の印鑑

宣教師はいづれも布教のかたわら、もろもろの学術や語学などを教えたので、翻訳の書物も発行されて、信者のうちにはローマ字を用いるものさえあった。 かの義鎮の如きもその1人でして、教名

第7話 島原の乱と鎖国

をドン・フランシスコといい、ローマ教皇に呈した信書にも、「豊後国主フランシスコ」と署名したほどでした。彼はローマ字の印などもこしらえていた。また、教名をシメオンといった黒田孝高のローマ字の印や、黒田長政、細川忠興、細川忠利らの日本名をローマ字で綴った印なども今日に伝わっています。

秀吉のキリスト教禁止

ところが、当時の宣教師および信者のうちには、みだりに神社や仏寺をこわしたりして、わが国の風にならぬ者がいた上に、キリスト教の布教は、外国人が人心を取めて、我が領土を奪おうという手段ではないかと危ぶまれるような仔細もあつたりしたので、信長の偉業をついだ秀吉は、先づ天正13年に、京都の南蛮寺をこわして、宣教師を国外に放逐し、同15年6月19日には、断然とキリスト教を禁ずる法令を出した。

けれども、彼は外国との貿易はむしろこれを奨励したので、ひそかに商船に乗り込んで来る宣教師は、その後も中々絶えず、キリスト教の伝道はなお方々に行われていた。

しかも、一方、秀吉は小田原征伐をしたり、つづいて朝鮮征伐をしたりしていたために、キリスト教の取締まりはこれを十分にすることが出来ないうちに、慶長3年を以って薨じたのです。

家康も同じ方法

その後をついだ家康もまた、秀吉と同じ方針で、キリスト教はこれを禁じたが、通商はこれを励ました。前話にも述べたように、彼はオランダ人ヤン・ヨーステン及びイギリス人ウィリアム・アダムスをその外交の顧問として、ますます広く海外との交通を開こうとしたほどです。それで、次第に商船の来往がさかんになるにつれて、宣教師のひそかに渡来するものが絶えず、容易に禁止の目的を達することが出来ないばかりか、却ってその信者は年々増すばかりでした。

信者の処罰と宣教師の追放

それで幕府は、慶長17年3月、改めてまたキリスト教禁止の令を出し、厳重に宣教師や信者を処分したが、この時、改宗の命に従わずに、追放された旗本の信者だけでも14人に及んだということです。かの肥前の有馬晴信の如きも、この頃、甲斐の郡内に移されて、ついで自殺を命じられた、しかも翌18年12月にはまたもや禁令を出して、その翌19年には宣教師や信者を澳門やルソンに追い払った。その中には、攝津高槻の前城主高山右近や、丹後の前領主内藤如安のような旧大名などもあつたほどで、彼等は宇喜多久閑、品川右京、芝山権兵衛などという武士らと共にルソンに追われて、ついにマニラで死んだ。この時一緒に追放された者だけでも100人余りもいたと言われる。

宗門改め

元和2年4月、家康が薨じて秀忠の代になると、その8月にまたもや禁令を出して、厳重にキリスト教を取り締まる一方、全国の戸毎に所属の寺を定め、即ち国民に悉く仏教に帰依させて、寺院に宗門帳

第7話 島原の乱と鎖国

を作^{だんか}って、その檀家^{せいしこんいん}の生死婚姻などの一切の証明をさせることにした。これを宗門改め^{しゅうもんあらた}と^いった。
嫁^{よめ}に行くにも、丁稚^{でっち}とな^{ほうこう}って奉公するにも、檀那寺^{だんなでら}の証明^{しょうめい}がなければ、むこうの家で入れてくれないの
です。

また、宣教師^{しよ}や信者は、見つけ次第に死刑に処^{しよ}すことにしたが、一般の外国人に対しても、江戸、京
都、大阪、堺などには一切滞在^{いっさい}することを禁^{きん}じ、中国船以外の外国商船はすべて長崎と平戸^{きこう}とに^き限^{げん}って寄港
することが出来ることにしました。

変装^{へんそう}して入り込む宣教師^{はい こ せんきょうし}

それでもなお^{すがた}姿^たを変えて入り込む宣教師は絶え^あなかつた。ここに1例^あを^あ挙^あげてみると、元和6年
の事だと伝えられているが、オランダとイギリスとの連合艦隊^{れんごうかんたい}が、一隻^{せき}のポルトガル船^{ほかく}を捕獲して平戸に
来^きた。その船の船長^{ほうじん ひらやまじょうちん}であつた邦人^{まつうらし}の平山常陳^{まつうらし}はその不法^{まつうらし}を領主^{まつうらし}の松浦氏^{まつうらし}に訴^まえたが、オランダ人は、
その船中に2人の宣教師^{しよ}が乗り込んでいるのを見つけた^{しよ}とい^{しよ}つて、それを捕獲^{しよ}の理由^{しよ}とした。常陳^{じょうちん}は乗
組員^{くみいん}を皆商人^{い は}だとい^い張^はつたが、翌年^{ついで}にな^{ついで}つて、宣教師^{しよ}の1人^{しよ}が遂^{ついで}に自白^{じはく}したために、常陳^{じょうちん}および2人
の宣教師^{しよ}は焼^やき殺^{ころ}され、その他の乗組員^{しよ}は首^{しよ}を斬^{しよ}られた。

イスパニア^{みっしよ}の密書

この船にはまた、日本^{かく}に隠^あれている宣教師^{みっしよ}に宛^あてたイスパニア^{みっしよ}からの密書^{みっしよ}があつて、その中に、「日本
人の半数以上^{しんじや}が信者^すにな^つつたら直^しぐに告^あげ知^あらせよ、数多^{あまた}の軍艦^{ぐんかん}を派^は遣^{けん}するから」という意味^{もんごん}の文言^{もんごん}があ
つたのをオランダ人^{しよ}が指^{しよ}摘^{しよ}したとも伝えられている。そのころ、オランダ人^{なんばんじん}は南蛮人^{なんばんじん}をしりぞけて、日
本貿易^{どくせん}の利益^{どくせん}を独^{どくせん}占^{どくせん}しようとしていた^{どくせん}ので、わざとこ^{どくせん}ういう手紙^{ぎさく}を偽^{ぎさく}作^{ぎさく}したりして、幕府^{ちゆうぎだ}に忠義^{ちゆうぎだ}立^{ちゆうぎだ}てした
のであ^{やしん}らうとい^{やしん}う説^{やしん}もあ^{やしん}りますが、しかし、イスパニア^{やしん}の野心^{やしん}につ^{やしん}いては、秀吉^{しよ}の時代^{しよ}からす^{しよ}でにわが国^{しよ}
では気^{しよ}づいていた^{しよ}のです。それは慶長元年^{とさ}にイスパニア^{とさ}の商船^{ひょうちやく}が土佐^{とさ}に漂^{とさ}着^{ひょうちやく}した時^{とさ}、5奉行^{ぶぎょう}の1人^{ぶぎょう}
の増田長盛^{ますだながもり}がその取調^{とりしら}べに行^とくと、船長^{なごもり}は世界地図^{なごもり}を示^{なごもり}して、イスパニア^{なごもり}の領分^{なごもり}がいかに広^{なごもり}いかを説^{なごもり}明^{なごもり}し
た上^{なごもり}に、長盛^{なごもり}が、「どうしてそ^{なごもり}うい^{なごもり}う広^{なごもり}い領地^{なごもり}を得^{なごもり}たのか?」と尋^{なごもり}ねたの^{なごもり}に對^{なごもり}して、「先^{なごもり}づ宣教師^{なごもり}をや^{なごもり}つて、
キリスト教^{どみん}で土民^{なつ}を懐^{なごもり}けてお^{なごもり}いて、そしてその土地^{あわ}を併^{あわ}せるのである」と答^{なごもり}えたので、長盛^{なごもり}がその趣^{なごもり}を
秀吉^{ふくめい}に復命^{ふくめい}すると、秀吉^{ふくめい}は驚^{ふくめい}いて、一層^{ふくめい}嚴重^{ふくめい}にキリスト教^{ふくめい}を取り締^{ふくめい}まったとい^{ふくめい}うことがあ^{ふくめい}つたのです。

とにか^{こう}くキリスト教^{こう}の禁^{こう}止^{こう}につ^{こう}いては、秀吉^{こう}も、家康^{こう}も、秀忠^{こう}も、いろい^{こう}ろと方法^{こう}を講^{こう}じて見た^{こう}が、
一方^{ほうえき}で貿易^{しょうれい}を奨^{こう}励^あしていたので、な^{こう}かなかその効果^あが上^あがらなかつたのです。

家光^{いえみつ}のキリスト教^{げんきん}厳禁

こうして元和9年^{しよ}に秀忠^{しよ}が将軍^{しよ}職^じを辞^{しよ}して、子^{いえみつ}の家光^かがこれに代^かわると、その翌寛永元年^{かんえい}に、幕府^{かんえい}
は沿海^{えんかい}の諸大名^{えんかい}に命^{えんかい}じて、キリスト教^{えんかい}信者^{えんかい}が海外^{えんかい}から渡航^{えんかい}して来^{えんかい}るのを厳禁^{えんかい}させ、又^{えんかい}、国内^{えんかい}に潜^{えんかい}伏^{えんかい}してい
る信者^{えんかい}を捕^{えんかい}らえて、これを死刑^{えんかい}に処^{えんかい}させた。この時^{えんかい}、江戸^{えんかい}で捕^{えんかい}らえて、品川^{えんかい}で焼^{えんかい}き殺^{えんかい}した宣教師^{えんかい}および
信者^{えんかい}だけでも50人^{えんかい}であつたとい^{えんかい}う(訳注:現在、東京港区^{えんかい}区^{えんかい}札^{えんかい}の辻^{えんかい}に都旧跡^{えんかい}:元和^{えんかい}キリシタン^{えんかい}遺跡^{えんかい}が在^{えんかい}る)。
しかも、これを全国^{えんかい}にわた^{えんかい}って励^{えんかい}行^{えんかい}したので、その殉教者^{えんかい}の全^{えんかい}体の数^{えんかい}は、恐^{えんかい}らくは夥^{えんかい}しいもの

であったでしょう。

踏み絵

けれども、表面は改宗したと称して、仏壇を供えたりして、いかにも仏教信者らしく見せかけながら、その実は、なおひそかにキリスト教を信じている者が少なくなかったのです。これを見出すために、幕府は寛永3年の頃から、彼等が崇拝しているキリスト、もしくはその母のマリアの像を踏ませて、果たして彼等が改宗したかどうかを検査することにした。

「踏み絵」といって、その時代の人々はひどくこれを恐れたものです。その像は、初めは紙に刷ったのですが、多数の者に踏ませると、すぐに破れるので、後には木版に改めたが、これもまた度重なると踏み割られるので、更に後には銅板に改めた。これを平気で踏まない者は、「それ切支丹だ」といって容赦なく残酷な刑に処したのです。

禁書の令

寛永7年には禁書の令が出た、これは書物を読んで信者になる者もあろうからとの心配から、キリスト教に関する書物の輸入を禁じたのです。同10年には、特に幕府の許した船の外は、一切海外に渡航するのを禁じ、もし渡航したものは死刑に処



踏み絵

すること、また、海外に住宅を持っている日本人が帰国したら死刑に処すること、又、宣教師を見つけて訴え出る者には銀百枚を賞与すること、などの規則が出た。

同11年には、長崎の商人に命じて扇形の出島を築かせて、そこを外国人の居留地として、これまで市内に雑居していた南蛮人の商人をことごとくここに移らせた。

海外渡航の禁止

こうまでいろいろと工夫を凝らして、キリスト教の伝播を堰き止めようとしたけれども、それでもなお十分に効が無かったので、ついに同13年には、全く日本船の海外渡航を禁じ、又、南蛮人の子孫はこれを日本に残しておかないようにと、彼等が長崎で持った子やその母、およびその子を養子にしている養父らまでもことごとく海外に追放した。つまり、南蛮人の子孫であれば、日本婦人を母として日本に生まれた者でも日本には住まわせないことにしたのです。この時、追放されて、澳門やマニラに赴いた者はすべてで287人だったと言います。

島原の乱

こういう風に、幕府は年と共にますます厳しくキリスト教を取り締まったが、しかしなおひそかにこれを信じる者は絶えなかった。わけても九州地方の天草、島原辺には、篤くこれを信じる者が多かったが、

第7話 島原の乱と鎖国

彼等は幕府の圧迫のあまりにも厳しいのを怒って、ついに第109代 明正天皇の寛永14年(西暦1637年)に乱を起こした。島原の乱というのがこれで、今その顛末を簡単に述べて見ます。

あまくさとう 天草島とキリスト教

そもそも九州は、初めてキリスト教の伝わったところで、殊に早くから大名でこれを信じた者さえ少なくなかったところですから、従ってまた一般の信者も多く、中にも肥前の島原半島および肥後の天草島はその巢窟ともいふべきところでした。天草島はもと信者の一人でした小西行長の領地でしたが、行長が関が原の戦いで亡びてからは、肥前唐津の城主寺沢広高の領地となり、広高の死後は、その子の堅高が城代を下島の富岡においてこれを治めていた。

しまばらはんとう きりしたんだいみょう ぎら だいみょう 島原半島の切支丹大名とキリスト教嫌いの大名

また、島原半島は、もと切支丹大名として有名な有馬晴信の領地でしたが、晴信が、すでに前にも述べたように、キリスト教の信仰をどうしても渝えようとしなかったために、ついに自殺させられて、その後にはキリスト教嫌いの松倉重政が大和の五條から移されて領主となったところです。重政は剛勇を以って聞こえた人で、領内にキリスト教を根絶しようとの考えから、厳しくこれを取り締まった。

苟くも改宗しない者は、生きながら海に沈め、あるいは温泉岳の噴火口に投げ込み、或いは竹鋸でその首を挽切るようなことまでしたのみならず、真にこれを根絶するためには、東洋における布教の中心地であるルソンを征伐するのが近道であるとして、独力でこの征伐の案を立てて、幕府の許しをも受けたのだが、その準備が漸く出来た時に病気で死んだ。その子の勝家があとをついで、父と同じく大いに信者を苦しめたりしたが、彼は威望のない人でしたので、圧力が利かず、ついに島原の信者は窃に天草の信者と謀って乱を起こすに至ったのです。

てんどうますだ ときさだ 天童益田時貞

それは、寛永14年の冬のことでしたが、それには益田四郎時貞という不思議な少年が天草島に出たことも一つの原因となっています。時貞は小西行長の旧臣益田甚兵衛好次の子で、この時、年は16才でした。容貌も美しく、才知もすぐれ、所謂1を聞いて10を知る明があった上に、不思議に人を惹きつける一種の魅力を持っていた。彼に就いては、しばしば妖術を行って見せたという噂なども伝えられている。天から鳩を招き寄せて、掌に載せて卵を産ませ、その卵を割って中からキリスト教の経文(即ちバイブル、聖書)を取り出したり、雀のとまっている竹の枝をそのまま折って人に渡したり、一本歯の下駄で海の上を渡って、天草島と島原半島との間に在る湯島に行ったりしたという事などが即ちそれです。はやくからキリスト教の奥義に通じてもいたりしたので、人々は全くキリストの再来かのごとく信じて、天童としてこれを崇めていた。

これより先、同じく天草群島のうちに潜んでいた行長の旧臣大矢野松右衛門、千束善左衛門、大江源右衛門、森宗意軒、山善右衛門の5人は、元来、熱心なキリスト教信者でしたので、常に天草島および島原半島の地を徘徊して、ひそかにその布教をしたりしていたが、時貞が非凡な少年であるのを見

第7話 島原の乱と鎖国

ると、これをこを押立ててキリスト教を再興しようと企てた。

折柄、九州は早魃で炎天がつづき、真っ赤な夕焼けが毎日さかんに現れたのみならず、秋だというのに、いろいろの樹に花が咲いたりした。人々はこれを不思議な事にしたのはいうまでも無い。この時、江戸では将軍家光が前年から病気でしたが、実はすでに薨じたのだなどという噂も伝わって来た。

未来記の予言

そこで、彼等はこのをもそれをも利用して、一つの流言を放った、それは慶長19年に追放された宣教師が、書き遺しておいた未来記に、「今から25年後になれば、暴主はことごとく世を去り、新たに救世主となる神童が現れるであろう。その年は空が焼けて赤くなること数日にわたり、諸木に時ならぬ花が咲くであろう。これがその前兆で、この時、大いに我が宗門を勧めれば、忽ちにして四海に弘まり、全く我が宗門の世となるであろう」ということがあるが、聞けば、このごろ江戸では暴主の将軍家光が薨じ、天草には神童時貞が現れた。その上、空は赤く焼け、諸木は春の如くに花が咲いた。すべてが『末鑑』にある通りです。いよいよキリスト教再興の時機が到来したのにちがいないというのです。

こういう種類の流言は、さらでだに信じられ易いものであるのに、その地方の人々の多くは、もともと無理に改宗させられて、表面だけ信仰を捨てたような顔をしていたのですから、殊に彼等にとってはこの上ない福音と響いたのです。彼等は一も二もなくそのままに信じて、時貞を彼等が加護する天使とも見た。松右衛門らは更に時貞の名で密書を天草、島原の村々に配り、この際、真の信者は一命を捧げて、キリスト教の再興のために力を尽くすようにと伝えた。信者等はいよいよ狂喜して、忽ち公然とキリスト教の復興を唱え出した。

島原領の一揆

これが事実となって最初に表面に現れたのは、島原領の有馬村で、農民が集まってキリストの画像を拝んだことです。この事が10月23日に島原に聞こえたので、藩ではすぐに同心をやって、その主になった2人を捕らえた。ところが、信者らはこの2人が殺されたものと思ったので、25日に白旗をたてて2人の昇天の霊を祭った。有馬村の役人がこれを見て、驚いて駆けつけると、信者らは俄かに起って彼を殺した。

こうしてすでに役人を殺した以上は、誅戮は免れないのですから、ここにいよいよ謀反することに決して、附近の村々に檄を飛ばした。共に起って領主に反抗することを求めたのです。これより彼等は至るところで役人や僧侶を殺し、寺院や一味しない民家を焼いて、略奪をほしいままにしながら、ついに島原城を襲おうとした。すでに全く暴民と化してしまっただけです。

折柄、急使を立てて江戸の藩邸および豊後の府内にいた幕府の目付林丹波守、牧野伝蔵に知らせると共に、熊本の細川氏および佐賀の鍋島氏に援兵を請うた。

緩慢な諸藩の手配

第7話 島原の乱と鎖国

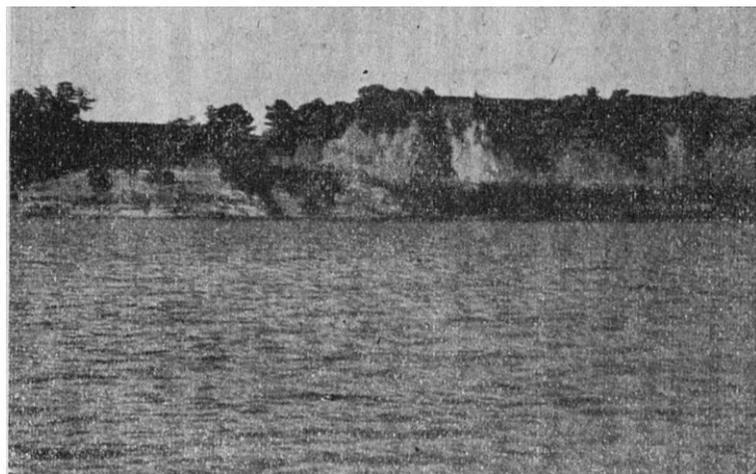
けれども、例の武家諸法度で、幕府の指図が無ければ兵を領外に出すことは出来ないことになっていたので、両家では早速豊後の目付のところに急使を出して指図を乞うたが、目付もまた権限以外の事だからとて、直接に江戸幕府の指図を待つようにと言った。そこで、止むを得ず、細川家は 4,000 の兵を川尻に出し、鍋島家は 3,000 の兵を刈田村に出して、封境を警備し、空しく江戸からの指図を待っていた。

こうして諸藩の手配が緩慢を極めていたのに引きかえ、賊は着々と戦備を整え、10月28日には使いを天草に送って、時貞を総大将に仰ぐことにした。

あまくさ いっき 天草の一揆

この時、時貞はすでに決死の徒 4,000 人を得て、将に長崎に押し渡って彼の地の同類と合しようとして企てていたところでしたので、すぐに喜んで島原賊の請いを容れて、自分は島原領の大江に赴き、一方、信者の一部を天草下島の富岡城に差し向けてこれを奪わせようとした。城代の三宅藤兵衛は驚いて急を唐津に告げた。11月10日に唐津の援兵 2,000 人余りが富岡に達したので、城代はこれに力を得て自ら城外に出て戦ったが、時貞もまた天草に渡って賊を援けたために、城方は大いに敗れ、三宅藤兵衛もついに戦死した。

賊は勝ちに乗じて城を囲んだが、城は要害の地である上に、城兵は遁れる道も無かったので、必死を期して防戦につとめたので、たやすくも抜くことができない。11月23日、賊はついに囲みを解いて、再び島原に渡り、有馬氏の故城である原城の址に寨壘を築いて、これに拠った。



長崎県 島原半島の原城址

はらじょうし よ 原城址に拠る

そもそも此の原城は、南有馬村の南端に高く位し、3方は険しい崖となって海に望み、西北の1方は小山が起伏して攻めるに難い要害の地です。賊はここに兵器や糧食を集めて準備を固めた。四郎時貞を主将として、大矢野松右衛門以下の浪士や庄屋が軍奉行となり、武将となって、おのおの1方を守り、老幼男女合わせて 30,000 人余りの信者が立籠もった。

おおさかじょうだい しょうち 大阪城代の処置

これより先、11月4日に島原の変報が初めて大阪に届いた。城代安部正次は、京都の所司代板倉重宗らと議し、今から江戸に言上して指図を待っているのは、空しく20余日を費やす事になっていて、その間にもますます賊の勢いを盛んにする虞があろうと、すぐさま使者を豊後に遣わして、府内の目付に、速やかに島原に赴いて臨機の処置をするようにと命じ、また、九州諸大名の家老には、出兵の準備を

第7話 島原の乱と鎖国

して、目付の命に随うようにと命を伝えた。

江戸には、11月8日に初めて松倉家の家老からの知らせがその藩邸に届き、翌9日に、府内の目付からの知らせが幕府にとどいた。

幕府の処置

幕府は寺沢堅高、松倉勝家に速やかに帰国して賊を平らげるようにと命じ、鍋島勝茂、細川忠利には、寺沢、松倉で賊を平らげることが出来ない時には、士卒を遣わして救援するようにと命じた。そして板倉内膳正重昌を上使とし、目付石谷貞清を副使としてその軍を統率させることにした。ところで、この上使と副使ですが、重昌は三河国の1小領主で、僅かに一万五千石を賜っていたに過ぎず、曾て武功のあった人でもなかったのに、貞清もまた武功の聞こえもなく、僅かに千石を食んでいた目付役に過ぎないのですから、とても九州の大藩を号令する資格も技量もなかったのです。しかも、幕府がこれを統率者として任命したのは、つまり、この乱を軽視して、愚民らの一時の蜂起と見侮って、諸大名の兵を動かす必要などが起ころうとは思っていなかったためで、所謂認識不足だったのです。

さて、重昌は、11月10日に江戸を出発して、27日に豊前の小倉に着き、初めて賊が尋常普通の所謂百姓一揆の類ではないのを知って大いに驚き、急に細川家に令して兵を天草に出させて、林、牧野の両目付にこれを監させ、鍋島、有馬、立花の諸家には兵を島原に出させて、自分は貞清と共に島原に向った。

板倉重昌の原城攻撃

こうして重昌は12月5日に島原に着くと、すでに集まって来ていた鍋島、立花、有馬の援兵すべて18,000余りに松倉勢を合して、総勢20,000余りにのぼったのを2隊に分け、1は鍋島勢を先鋒として海路から、1は板倉勢を先鋒として山手から原城に押し寄せて、12月8日の早朝から戦いを開いた。けれども、賊は堅固な寨壘に拠っているのに、こちらは僅かに盾1枚を隔てただけのことですから、賊の矢丸に斃れるものが甚だ多く、ついに城堡に近づくことも出来ずに退いた。

それで、重昌は先づ攻城の工夫からしてかかることにして、急に竹束を作り、諸軍營に櫓をあげて、その上から鉄砲を放させたり、外にもいろいろと手段を講じて、急に攻めかけたりして見たが、賊は一向に弱るけしきも無かったのに、身方は諸勢の間に協定がうまくつかず、そのためにもしばしば敗北したりしたので、ついに重昌は令を下して攻撃を中止させた。急に攻め寄せて、ますます多くの身方を失うよりは、しばらく城を遠巻きにして賊を兵糧攻めにしようとしたのです。

知恵伊豆の派遣

一方、江戸では、重昌が出発した後、九州の諸大名からの注進で、初めて事の容易でないのを知り、殊には、資格の低い板倉、石谷輩では、とても思うように他藩の兵を動かすことは出来まいからと、11月27日、更に老中松平伊豆守信綱を総師として、大垣城主戸田左門氏鉄を副使として派遣することにした。

第7話 島原の乱と鎮国

のぶつな

信綱らは 12 月 3 日に江戸を出発した。

この知らせが 12 月 28 日に島原の重昌のところへ届いた。と同時に、彼の親友の井伊直孝および兄の京都所司代板倉重宗からも書面があって、両使の着かぬ前に賊壘を陥れなければ面目が立ち難からう、と激励して来た。

重昌の総攻撃

そこで、重昌は諸将を会して、改めて松平、戸田の両使の来ることを告げ、自分が今まで強いて攻撃しなかったのは、偏に身方の損失を恐れたからだ、今、賊壘が陥らないために両使が来ることになったに就いては、もはや一刻の猶予も出来ない、明早朝に総攻撃をして雌雄を決することにする、おのおのその用意をするようにと命じたが、たまたま其の翌 29 日には大雨でしたので、1 日延ばした。

明ける寛永 15 年正月元日、夜来の烈風は土砂を捲いて、天地は真暗でしたので、定めし賊は防備を怠っていたようと、有馬家の兵が真っ先に進んで賊壘に迫った。これを見て諸軍も共に競い進んで、一挙に攻め破ろうと、争って壘の下に迫ったが、賊は予ねてこれを知っていたのか、案外にも諸方の守備が甚だ堅く、有馬勢が先づ敗れて退き、松倉、鍋島の軍も相次いで敗れた。

重昌の戦死

重昌は、その日、城が陥らなければ戦死の覚悟で、朝、出陣の際に、「去年の元日は江戸城にして烏帽子の緒をしめ、今年の今日は、鎮西の原城に冑の緒をしめ、早打ち立ち候、何事もかわりゆく世の習い今更に候」と石谷貞清に書き送ったくらいですから、今、諸勢が破れて引き退こうとするのを見ると、馬を馳せて諸軍を叱咤し、再び壘下に迫らせようとして見た。しかしいづれもぐずぐずして、進撃しようとしなかった、この上は致し方ないと馬を下りて、手兵を堤げて城に迫り、自ら城壁に攀じ登って奮戦したが、ついに敵弾に中って仆れた。年は 51 才でした。石谷貞清も手傷を負い、わづかに敗兵を収めて退いた。この日、寄手の損害は、死者 600 余人、傷者 3,200 人余りに及んだのに、賊の死傷は僅かに 17 人でしたというのを見ても、いかに寄手が苦戦したかが察せられるではありませんか。

此の敗報が 11 日の夜に江戸に達した。家光は大いに重昌の軽挙を怒り、且つ諸家の兵が力を尽くさずして敗れたのを怒り、すぐその日に、当時、江戸詰めであった細川忠利、鍋島勝茂、立花宗茂、有馬豊氏、黒田忠之、島津光久、有馬直純らの九州の諸大名に速やかに帰国して兵を率いて島原に赴くようにと命じた。

信綱も持久策

一方、松平信綱らは、重昌の討死した 3 日後の正月 4 日に有馬に着いたが、すぐと仔細に賊壘を見て、急に陥れることの難いのをさと、やはり重昌と同じく、持久の策を取って、城中の糧の尽きるのを待つことにした。尋いで、九州の諸大名が陸続と兵を率いて参着すると、信綱は、おのおのの陣中に仮山を築き、その上に櫓を設け、賊壘を見下ろして、鉄砲を放たせたが、賊もまた櫓の上からこれを砲撃して、却ってしばしば我が軍を傷つけた。

第7話 島原の乱と鎖国

オランダ商船の来援

この時、信綱はまたオランダの商船デ・リップを平戸から有馬に回航させて、海上から大砲を賊壘に放たせた。けれども、これも大して効果は無かったのみならず、熊本の城主細川忠利の如きは、「もし急に賊壘を抜こうというなら、我が五十万石の兵士の1/3を失う覚悟さえすればよい。しかるに、今、わづかに2～30,000の百姓一揆に外国商人の援助を受けるのは国辱である」と言って諫めたので、信綱は、「これは賊が、近々キリスト教国から加勢に來ると言い触らしているという事だから、その偽りであることを城中の者に知らせようとしただけのことである。それで、もうその目的も達したから引上げさせよう」と答えて、すぐに其の日にオランダ人の労を謝して平戸に帰らせた。正月27日の事です。

知恵伊豆の知略も無効

この頃、この有馬村に集まった九州諸藩の兵は、総勢124,000人余りと註せられた。しかし、信綱は、依然として戦争を避けて、専ら諸軍から矢文を賊壘に放って降参を勧めさせた。おりから、四郎時貞の母、姉、および姉婿の大矢野小左衛門らが肥後で捕らわれて、獄中に在ったのを召寄せ、彼等に書面を認めさせて、これを城中に持たせてやったりした。降参するにおいては、たとえ四郎時貞でも、命を助けて相当に手当てをしてやる、という文面で、殊に母の書面は、人情に搦んで四郎の心を動かそうとしたものでしたが、しかし、これもまた少しも功は奏さなかった。

そこで、信綱は更に金山の坑夫を招いて、坑道を穿たせて、地下から賊壘に迫ろうとしたが、城中でもこれを知って、同じく穴を掘り、生の松や杉の葉をいぶして坑夫の働きを妨げたり、或いは臭気紛々たる汚物や何かを坑道に満たして、進めなくしたりしたので、これもまた成功しなかった。

糧食の欠乏

けれども、そうこうしているうちに、籠城もすでに100余日になって、城中の糧食が尽きかけたので、賊はあべこべに寄せ手の陣に夜襲して、兵糧弾薬を奪おうとした、2月21日には、黒田、寺沢、鍋島らの陣を襲い、黒田家の家老以下を戦死させ、鍋島の陣屋を大半焼き払ったが、しかし、目的は達しなかった。この時、捕虜になった賊の言葉や何かで、城中の飢えている様子が明らかになったので、信綱はいよいよ28日を以って総攻撃の日と定めた。

一揆の平定

ところが、27日に賊が三の丸を捨てて二の丸に移ったのを見た鍋島氏の兵は、急に起って三の丸から二の丸を攻めて火を放った。この抜け駆を怒って、諸軍もまた急に競って進んで、賊を本丸に追い詰め、ついに翌二十八日に城壘を陥れた。主将時貞は細川の家臣が討ち取ったが、この日、諸軍の手で殺した賊の男女は10,000人余りであったという。信綱は令して、城を毀って火を放させたので、焼け死んだものもまた多かった。

そこで、時貞以下の首を柵の木に梟して、諸軍は3月朔日から次第に凱旋の途についた。

島原平定の報は3月9日に江戸に達した。

第7話 島原の乱と鎖国

諸将の処罰

幕府は若年寄大田資宗を豊前の小倉にやっ、一先づ諸将の労を犒わせたが、一同を江戸に上らせてから、その功罪を論じて、大いに幕府の威厳を示した。先づ島原の松倉勝家は、領内に悪政を施していたために乱を醸したからと、その領地を没収した上、斬罪に処した。唐津の寺沢堅高は、領内に叛民が起こったからとて、天草四万石を取り上げられた。この外、鍋島勝茂は軍規を破って抜け駆けしたと閉門（註：塾居よりは軽く、逼塞よりは重い刑。その門扉を堅く閉ぢて、奴僕の出入りも許さぬもの）にされ。板倉重昌の子重矩および石谷貞清は、元日に無謀の戦いをしたとて逼塞（註：閉門より軽く、門を閉ざして夜間のみ人の出入りを許したもの）され、林、牧野の両目付もまた、賊が蜂起した知らせに接した時の処置を誤ったとして叱責された。

この時、皮肉と風刺とで有名な大久保彦左衛門が、鍋島家の玄関に行つて、一番駆けの手柄をしながらも、閉門を仰せ付けられるとは、不思議な事だが、時世とて止むを得ません、お見舞いのために彦左衛門参上致した、と大声で言つて帰つたという話があります、彼は閉門を失当と思つたのであろう。

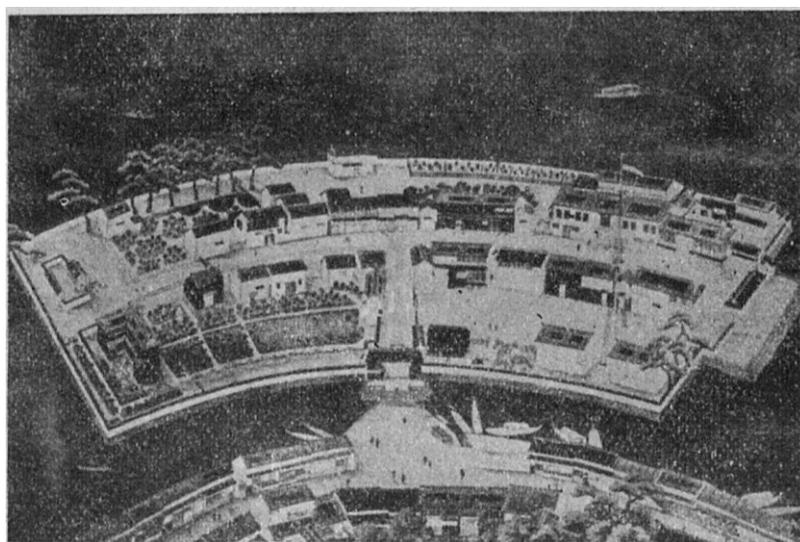
しかし、後、12月になつて、閉門、逼塞等の人々はこれを免ぜられた。

鎖国の令

さて、幕府はこれよりいよいよキリスト教を嫌つて、その禁を厳にして、例の宗門改めや踏み絵を一層厳しく励行したが、それだけではなお十分に禁止の実が挙がらないのを見ると、更に鎖国の方針を立て、島原の乱後1年半の寛永16年（西暦1639年）7月に、ついに令を下して南蛮船の来航を禁止し、今後もし渡来すると、その船を毀ち、乗つて来た者は速やかに罪科に処すべき旨を言い渡した。そして其の翌8月、平戸および長崎にいたオランダ人以外の西洋人は、ことごとくこれを国外に放逐した。

オランダ人を島に移す

ただオランダ人だけは、かつて布教に関係したこともなく、常に幕府のために図つて、島原の乱にも叛徒を砲撃したりなどして、ひたすら好意を示したので、特に居留を許されたが、これも寛永18年には、平戸から長崎の出島に移され、中国人と同じく長崎だけで貿易することを許された。出島は僅かに3,967坪（13km²）余りの小島で、前にも述べたように、かつて長崎の市民が幕府の命を受けて、南蛮人の居留地として築いたものだが、今や彼等がいなくなったので、オランダ人が代つて住むことになったのです。但し、彼等もまた、ここから外には自由に出入りを許されず、長崎市中の見物でさえ1年に何



長崎 出島のオランダ商館

第7話 島原の乱と鎖国

回と限られて、その際にも番人が付添うことになっていた。

こうして、幕府はすでに洋書の輸入を禁じたので、ついにキリスト教は国内に絶えて、幕府の目的は達したが、一面、外国との交通は全く衰え、国民は西洋の文明に遠ざかるに至った。ただオランダの船が毎年長崎に来る毎に、その船長が江戸に赴いて将軍に謁し、ヨーロッパの大勢を知らせたので、幕府はこれによって纔に海外の事情を知るだけでした。

それで、これより約200年余り、アメリカの軍艦が来て通商を開くまでを鎖国時代とも言っているが、斯うして国を鎖したために、戦国時代以来、大いに海外に発展しようとした国民の進取の意気は全く抑えられて、わが国は永く世界の進運に遅れた。けれども、そのためにまた、国内の政治が整って泰平がつづき、産業や学問が発達したということもありました。

つづいてそれを語る前に、幕府の朝廷に対し奉る態度について、次に一話をおいて先づお話しておきたいと思うことがあります。

(第7話 島原の乱と鎖国 終わり。 次は前頁に戻り、第8話 朝廷に対する幕府の失態 に)